

第 32 期京都漢方研究会「4 月特別講演②」
2022 年 4 月 17 日

「漢方の改革者 細野史郎先生」

京都 聖光園細野診療所 中田敬吾

細野史郎先生は昭和 13 年に一大決心をされ西洋医学を離れて全面的に漢方医の道を進むことを選択された。

第二次大戦後、坂口弘先生の入門を機に日本東洋医学会設立に参加し、日本の漢方医学の復興と発展に寄与されてきた。

然しながら細野先生は証に随って治療するという従来の日本漢方のあり方に根本的に不備があるのを痛感し、日本の漢方を改革すべく懸命に努力なされてきた。吉益東洞は漢方医学の基礎理論としての陰陽五行論を机上の論として排斥し日本の漢方を大きく改革したが、細野先生の仕事もそれに匹敵する程の重要な改革であったと思っている。

細野先生の仕事を一言で言えば「**日本漢方の近代化への改革**」といえる。

*

昭和 13 年から漢方治療を続け、漢方薬の有効性は認めるがそれがどのようなメカニズムで効果を発揮しているのか全く分からないことに大きな不満を感じていた。漢方薬の薬理作用がわかっていたら主観的で客観性に乏しい証などに頼らなくても西洋医学的な診断だけで正しい漢方治療が出来るはずだと考えるようになった。作用機序のわからないものを薬として使用することは医師の良心に反するとまで考えていた。

坂口先生の入門により余裕が出来た細野先生は診療所の中に実験室を作り、芍薬甘草湯の薬理実験を開始しそれに成功した。昭和 28 年日本東洋医学会学術総会でその成果を発表した。この発表を聴いた東大の板倉博士はわざわざ壇上まで上がってきて細野先生に握手を求め、「素晴らしい発表でした！これで日本の漢方に夜明けが来た！」と芍薬甘草湯の薬理研究を絶賛されたと伝え聞いている。

細野先生の功績の主なものを箇条書きに纏めると以下のようなになる。

- ①漢方薬薬理研究の開拓
- ②漢方エキス製剤の研究開発
- ③漢方の証の客観化への研究
- ④多数症例に基づく主要慢性疾患の臨床研究
- ⑤国際交流の推進

これらの細野先生の足跡を紹介し、現在の日本漢方における細野先生の功績と意義について述べたいと思う。